volume 72
JULY 2000

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA
52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 Japan

inside NEWS

平成１２年度開学記念行事

第１部「がんばる県大人～ヒーローヒロインを探せ」
第２部「はばたきの集い」

講演する溝口助手

4月20日は、昭和62年に現在の体育館にて本学の開学式と第1回入学式が行わたことを記念して、開学記念日とされている。

開学記念行事実行のために、開学記念行事実行委員会が組織され、各部局の教員、事務職員、学生団体代表が加わって行事を企画、運営した。

第1部では、それぞれの分野でがんばる本学の教員、学生の活動の紹介を行った。クラブ・サークル連合会長の経営情報学部三年生、可知英俊さんと国際関係学部2年生の西郷　綾さんが司会進行を担当した。短期大学部社会福祉学科、バルセロナ5輪柔道銀メダリストの溝口紀子助手が、オリンピック参加時の思い出、エピソードをスライドを交えて紹介し、興味深い体験談の披露に会場が沸いていた。なお溝口助手は、今年度文部省在外研修員として、INSEP（国立スポーツ・体育研究所）に研修渡仏する。

学生では、経営情報学部4年生の磯田進也さんから、陸上競技に関する体験談が披露された。磯田さんは平成11年5月に開催された、東海学生陸上競技大会選手権大会男子10種で2位の成績を修めている。本学には陸上部がないため一人で、練習に励んでいるエピソードが紹介された。

卒業生からは、平成12年3月に国際関係学部を卒業した上島秀正さん、同じく藤木慎介さんが、

司会の可知さんと西郷さん

講演する磯田さん

2人のコンビで本学在学中のサッカー部での活動を紹介した。2人はブラジルに渡りプロサッカーリーグの練習生になる予定。

講演の後は、サークル・クラブの活動紹介が行われた。JAZZ DANCE CLUBのダンスが三曲、披露された。コーラス部は合唱曲の披露とともに、客席の参加者に呼びかけて校歌の練習を行った。コーラス部のピアノ伴奏は短期大学部社会福祉学科の宮脇長谷子助教授が演奏した。

校歌を歌うコーラス部

引き続き午後6時から行われた第2部「はばたきの集い」には、多数の学生、教職員が参加し、学生ホールで懇親会が行われた。司会進行は新入生歓迎委員会委員長の薬学部4年生、金子直樹さんと国際学友会副会長の国際関係学部2年生、寺田めぐ美さんが担当した。学部を超えて教職員、学生が一堂に会して懇親する貴重な機会であり、参加者は活発に交流を深めていた。

JAZZ DANCE CLUB

卒業生の上島さんと藤木さん

ピアノ伴奏する宮脇助教授

平成12年4月10日、本学大講堂で静岡県立大学入学式が行われた。多数の来賓の出席のもと、5学部546名の新入生を前に廣部学長が式辞を述べた。また入学生を代表して、薬学部　高柳祥一さんが誓いのことばを述べた。

平成12年度静岡県立大学入学式式辞

本日ここに、柴静岡県副知事、鈴木県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々、また多数のご父兄のご臨席を頂き、盛大に平成12年度、静岡県立大学入学式を挙行出来ますことは、誠に慶ばしい限りであり、関係者各位に心から御礼を申し上げる次第です。

長年にわたる努力の結果、本日入学を果たされた5学部、546名の新入生諸君もとより、これまで陰ながら支えてこられたご家族の皆様のお喜びも定めし大きいことと思います。大学を代表し、まず心からのお祝いと、歓迎の意を表したいと存じます。

本学は、昭和62年、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学を改組統合し、あわせて新学部を増設し、発足したもので、現在5学部8学科、大学院4研究科、付属研究所、研究施設および短期大学部を擁する総合大学であります。部局構成も、国際関係学部、経営情報学部、薬学部、食品栄養科学部、看護学部、医療・保健・福祉を中核に据えた短期大学部、環境科学研究所、という、21世紀における最重要課題を展望しつつ、新しい時代を支える有為な人材の育成を目標としている点で、先見性をもった、我が国の中でもユニークな大学であると考えております。

しかし我が国も、本格的な少子高齢化時代に入り、長引く経済不況ともあいまつて、すべての大学を取り巻く環境は、現在一段と厳しさを増してきており、その存在をかけた抜本的な意識改革が求められております。本学も創立から13年を経て、あらためて建学の精神を思い起こすとともに、時代の変化をも十分視野に入れつつ転換を図らねばなりません。しかし、いかなる時代であれ、大学は、すぐれた教育と研究を通して、有為な人材を育成し、研究の成果とともに社会に還元することを最大の使命とすべきことに変わりはないと考えます。問題は、すぐれた教育、研究とは何か。求められている有為な人材とは。成果の社会への還元はどうあるべきか。といったことが、時代によって、社会状況によって変わり得るということであります。大学の改革についても、何が変わるべきなのか、また何が変わってはならないのか、ということを十分点検・評価しつつ行うべきことは当然であると考えます。

諸君は、自らの意志で本学を選択し、期待に胸ふくらませて入学をされたはずであります。これからの4年間で、どれだけの付加価値を身につけることが出来るか社会は期待をもって見守っております。それには教育する側の責任は当然として、諸君たちの心構えが極めて重要であります。これから始まる講義や実習の中で、自ら選んだ学部の設置目的や理念が、どのような関わりをもつて示されるのかを、十分考えながら学び取る姿勢が大切であります。そのことによって、受ける感動も、得られる成果も大きく変わって来るからであります。理解出来ぬこと、納得の行かぬ点については、大いに質問をし、議論を深めることが大切であり、教師はそれに対し十分な説明責任を果たす義務があります。教育の場にお

いては、そのような緊張関係が常に必要でありますし、それが優れた教育ということにもなるのであります。教員の教育評価の中に、学生による評価を取り入れることが、これからは一般化して来ると思いますが、学生諸君の側にも、安易な点取り主義に流されず、自らも厳しい評価をうける自覚と、自己責任が伴うことは当然であります。食物も良く噛み締め、味わうことによってこそ、本当の栄養源となり、糧となるのであり、食するのは、ほかならぬ諸君自身であるということを肝に銘じて頂きたいと思います。すぐれた研究とは何かということは、大学院の進学式の方で申し上げるつもりでありますが、教育と研究とは本来不可分の関係にあるものと考えております。研究は常に新規なものを求め、真理を追究する中から、時代の先端を行く瑞々しい[知] の再構築が行われる訳でありますが、それらは常に教育の上に反映されるべきであると思います。そのことによって、真理に対する畏敬の念、未知なるものに感動する心、探求心を目覚めさせる教育が可能になると考えるからであります。現在、研究機能と教育機能を分離すべきという意見もありますが、研究と教育は相互に啓発し合うことで発展するのであって、少なくとも大学そして大学院における教育は、常に研究者あるいは研究感覚を有する指導者によってなされるべきであり、このことは時代を越えて、変わらぬ基本的な在り方であると私は信じております。

21世紀初頭における社会状況は、益々多様化し、豊かな未来を拓く原動力となる学術研究は、深く細分化される一方で、学際化、総合化の方向にも大きく展開して行くものと思われます。高度な課題探求能力、問題解決型の人材が、今広く社会から求められておりますが、大学は、その知的活動によって社会をリードし、社会の発展を支えて行く重要な役割と責任を担っているが故に、社会の要請に対しても、迅速・的確に対応出来るよう、研究・教育・運営体制の整備を含め、常に改革を進めて行く必要があります。諸君は、このような大学が担っている使命を良く理解した上で、社会が求めている有為な人材としての資質を備えるべく、ともに努力をして頂きたいと思います。

次にそれぞれの専門教育に入る前の導入教育として、大学では、いわゆる教養教育が行われます。本学でも全学共通科目として [人間と文化][人間と社会][人間と自然］というテーマのもとに、全学部の教員が協力して行っております。自身の目指す専門領域以外の分野の知識や考え方を知ることで、視野を広め、教養を高めることを目的としてはおりますが、単に知識を広めるだけの事であれば、最近は様々なメディアを通じて修得することも可能であります。むしろこの時期、学問とは何か。それは自分にとって将来どういう意味を持つのかなどを、専門分野を越えて共通する事柄を出来るだけ広く、その本質を学んでおくことが重要であると考えます。現在大学における教養教育のあり方をめぐって、その見直し論議が盛んでありますが、私は例えば歴史観に基づく考察力、人としての生き方などを深く思索する心を養うためにも、歴史学、倫理学、哲学、社会学など体系化された学問について、その入門書を、難解であっても、じっくりと読むことを諸君に勧めたいと思います。そして様々な問題について、自身のしっかりとした考え方を持ち、それを自分の言葉で人に語れるようであって欲しいと思います。その一方で自身の殻の中に閉じこもることなく、多くの社会との接点を持つことによって、様々な人々の考え方や生き方を知ることにも努め、他を理解し、許容できるスケールの大きな人間として成長して欲しいと心から願っております。

次に、本学は建学以来、国際交流を標榜し、世界各国の大学、研究所などと交流協定を結び、教員、学生の相互交流などを行う一方、多くの留学生諸君を正規に受け入れております。本年も学部、大学院あわせて6ケ国27名の皆さんが入学をいたしました。現在、本学に学ぶ留学生は、新入生を含め10ケ国、約80名に及んでおります。日本の象徴である美しい富士山を目の当たりに仰ぎ、しかも日本で最も快適な気候の静岡での充実した留学生活を送って頂きたいと、心から期待しておりますが、これまで大学として、必ずしも生活や勉学の面で、十分なケアをし

て来なかつたのではないかとの反省に立ち、昨年［国際交流談話室］を設置し、留学生とその他の学生、教職員との自由で円滑な交流をはかるとともに、いろいろの面での支援体制を充実するよう準備をいたしておりますので、留学生諸君は遠慮なく相談にお出で頂きたいと思います。

一方で、私自身の留学体験からも、異国の地にあつては、不自由であつても、出来るだけその国の言語、文化、習慣に慣れるよう努力することも必要で、自国の殻の中だけに閉じこもらず、多くの日本人や他国の留学生などとも接し、多くの事を吸収して頂きたいと思います。日本の学生諸君も留学生諸君と積極的に交わり、支援することなどを通じて、異文化を理解し、国際感覚を磨く絶好の機会として欲しいと思います。

次に今回、国際関係学部に一人の目の不自由な方が入学をいたしました。本学にとって初めてのケースでありますが、全学支援体制をもって、可能な限りの快適な修学環境の確保に努めてまいりたいと考えております。ご本人は高校では柔道部に属し、クラシツクギター、アマチュア無線、パソコンにも精通しておられるとのことであります。世の中には様々な障害を持った人々が沢山おりますが、それを乗り越えて、個性豊かな人生を送っておられる事は、われわれの大いに学ぶべき点であろうと思います。現在静岡県は全国に先駆けて『ユニバーサルデザイン』という考え方を、県政の基本的考え方として位置づけ、その実現に取り組んでおりますが、この考え方は、いわゆるバリアフリーという考え方を一歩進めて、障害のある人も、ない人も、すべての人がバリアーを感ずる事なく、自由に活動し、生き生きと生活出来る社会を作ろうと言うものであり、そのための［もの作り］［環境作り］を目指すものであります。しかし、この発想は、まず自らがその立場になって、何が必要なのか、何をどう改良すれば、すべての人にとって快適な環境になるのかなどを考えることから出発すべきであろうと思います。またそのような人々に対する深い思いやりの気持ちが根底にあることが必須であります。今回入学された方も、当面授業等で不自由を感ずることも多いかと思いますが、学生諸君の温かい協力を心から期待する次第です。

最後に、本学は静岡県における唯一の県立大学であり、有為な人材の育成を含め、教育・研究の成果を地域に還元することが強く期待されております。県民に開かれた大学として、これまでも、様々な研修会、公開講座等を企画し、生涯教育の機会を提供することに努めて参りましたが、今後は社会人入学者の数も多くなってくることが予想され、世代を越えた学生が、キャンノパスや教室の中に共存する時代も遠からずやって来るものと思われます。学生諸君も、様々な機会をとらえて、地域の人々との交流を積極的に図り、顔の見える県大生として、その存在感を示して頂きたいと思います。大学としても、県民のニーズや期待に応えられるよう、さらなる発展を目指したいと念願いたしております。

大学が常に生き生きとして、活性化されるためには、内外から常に刺激が与えられ、そのことによって、向上心がかき立てられるような競争的環境が必要であります。その意味でも、万物が躍動するこの時期に、新しい感覚を持った新入生諸君を迎えることが出来るのは、大学にとっても大変喜ばしいことなのであります。［慣れが怠惰を生み、怠惰が沈滞を招く］ことは世の常でありますが、大きな期待と希望を抱いて、入学を果たされた諸君は、初心を忘れることなく、研鑽に励み、常に自己を高める努力をして頂きたいと思います。一方で、2000年代最初の記念すべき年の入学にふさわしい、将来の自分史の中に残るような、夢のある大きな目標をたてて、その実現に向けて努力されることも大いに期待いたします。

諸君がこれからの４年間、生き生きとして、実りある学生生活を送り、本学に学んだことに誇りと喜びをもって卒業出来ることを心から願いつつ、諸君への歓迎の辞といたします。

平成12年4月10日

静岡県立大学学長

廣 部　雅 昭

平成１１年度静岡県立大学学部卒業式、大学院学位記授与式が平成１２年3月２２日に本学大講堂で行われた。

柴静岡県副知事、鈴木県議会副議長をはじめ多数の来賓の出席のもと、廣部学長が式辞をのべた。

また卒業生を代表して経営情報学部経営情報学科、池ヶ谷安里さんが答辞を述べた。

平成11年度卒業式式辞

本日ここに、柴静岡県副知事、鈴木県議会副議長はじめ多数のご来賓、ご父兄の方々のご臨席を賜り、ここに静岡県立大学平成11年度、学部卒業式ならびに大学院学位記授与式を盛大に挙行できますことは誠に喜ばしい限りであります。

蛍雪の功成って、本日卒業される5学部452名、大学院研究科修士課程109名、博士課程17名の諸君に対し、大学を代表して、まず心からお祝いを申し上げたいと存じます。またこの喜びをともに分かち合っておられるご家族の方々の、これまでのご理解、ご支援に対しましても、深い敬意と感謝を申し上げたいと存じます。

光陰矢の如しと申しますが、入学の感激を味わってから、瞬く間に過ぎた大学生活であったと思います。今諸君の胸の中を去来する思いは何でありましょうか。昨年の入学式の際、私は大学というところは、自ら積極的に学び取る姿勢が必要で、それによって自らを高め、さらには豊かな教養も、役に立つ学識も、円満な常識も身につくものであるという事を申しました。諸君の大部分は、充実感をもって今日という日を迎えたものと確信いたしておりますが、社会は諸君に対し、どれだけの付加価値を身につけて卒業して来るのかということに注目をしております。今後それぞれの職場などで、自身の能力と個性を十分発揮して、期待に応えられるよう、さらなる努力を果たして頂きたいと心から念願する次第であります。

諸君の中で、これから大学院に進み、さらに2年あるいは5 年を送る人達にとっては、大学を去るという感慨は無いかも知れません。しかし、これまでの長い間、ご両親を始め、多くの人々の庇護の下で過ごして来た、言うなれば [受け身] の時代から、精神的にも独立し、自分の力で世の中に立ち向かって行かなければならない [人生の大きな節目] が大学の卒業であるという自覚は持たなければなりません。

本年は西暦2000年代のミレニアムの年であり、激動の20世紀から、新生21世紀への大きな節目の年でもあります。このメモリアルな年に卒業される諸君には、是非とも、それぞれ現実性のある短期目標、また夢のある中・長期的目標を設定して、それに向かって努力して頂きたいと思います。しかし目標は、得てしてその通り達成出来ぬことが多いということも覚悟しておく必要があります。つまり世の中には予測の立たぬこと、思った通りに行かぬことが非常に多いということであります。状況の変化に応じて、適切に対処する柔軟性も必要であり、決してそれを以て人生の挫折と考える必要はないということであります。[人間万事塞翁馬] という譬えのように、最善の努力をした結果であるならば、それがベストのものと達観する大らかさも必要であります。

昨年末、いわゆる2000年問題で、世界は不安に揺れ、スーパーマーケットには、非常用商品が並ぶ2000年コーナーまで設けられたことは記憶に新しいことであります。これだけ技術が進歩しても、いや進歩し過ぎたが故に、その結果について、誰も確信をもって予測出来ないこともあるのだ・・ということを実感したことと思います。今世紀の科学技術の進歩には著しいものがあり、その結果、人類が受けた文明の恩恵には計り知れないものがあります。しかし一方で、当初はおそらく予想もしなかったであろう環境破壊、公害問題、医療過

誤など、不安なマイナス面が顕在化しつつあるのも事実であります。これら諸問題の解決には、速やかな改善を含め、技術開発の軌道修正を行うなど、真摯な対応をはかる責任が、科学者、そして行政にあるのは当然でありますが、“角を矯めて牛を殺す”ことがあってはならないと考えます。例えば飛行機事故や交通事故が多いという理由で、飛行機や車そのものの存在を、非難あるいは否定する人はいないと思います。またクローン人間の誕生の危惧があるからと言って、新しい医療技術への期待の高い、あるいは生命の神秘を解き明かす鍵ともなる、遺伝子に関する基礎研究までも禁止せよとは誰も言わないでしょう。勿論、法的規制も含め、厳しい倫理観が科学者など当事者に問われることは申すまでもありません。

申し上げたいことは、将来起こるかも知れない全ての事態を予測できないからという理由で、物事を実行しないといった消極的な姿勢であってはならないということであります。これから諸君が出て行く社会は、近年になく厳しいものがあります。そのことは、就職活動等を通じて、諸君自身が肌で感じていることと思います。

今諸君に求められていることは、何事にも勇気をもって挑戦し、社会を改革するくらいの積極的な姿勢と気概を持つことであると思います。石橋を叩いて渡る慎重さは勿論重要でありますが、失敗を恐れず、果敢に挑戦する勇気を、特に若い諸君には期待したいと思います。石橋を叩いて引き返す消極的な人間、最初から叩きも渡りもしない当事者意識に欠ける人間は、いずれ社会から淘汰されてしまうでしょう。今社会は、あらゆる面で変革をしなければ、国際化や経済構造の変化などが、急速に進む、祈しい時代に適応できなくなって来ております。広い視野と、豊かな学識、円満な常識の焉養に努めるとともに、自身のしっかりとした考え方を持つこと、その一方で、他の多くの人々の考え方にも謙虚に耳を傾け、正しい、あるいは必要と判断したことは、果敢に実行すること、また誤りがあったと気づいた時は、直ちに軌道修正をする勇気と柔軟性を持つことも大切であります。

次に、これまでの大学院における研鑽の成果が評価され、本日学位記を授与された諸君に一言申し上げたいと思います。修士課程の修了者は、より専門的な知識と高度な技術を身につけた高度専門職業人として、社会から期待をもって受け入れられる筈であり、また博士課程を修了された諸君は、今後さらに研究者としての厳しい道を歩むことになると思いますが、修士課程は、さしずめ車の仮免を取得し、これから路上運転が許可された段階、博士課程は、免許を取得したばかりの若葉マークをつけた運転者に相当すると考えたら良いと思います。高度な基礎知識と技術の上に、諸君自身が、今後さらなる研鑽を積むことによって、名ドライバーにもなれる無限の可能性を秘めているといえます。今までは、助手席に座った指導教官からの指示に従って運転をしていたのが、今度は、一人で運転をする時が来た訳であります。交通ルールとマナーを守って、事故を起こさぬよう慎重に、腕を磨き、時至らば、大胆に勇気をもって他の車を追い抜く爽快さを味わって欲しいと思います。

申すまでも無く、研究には、独創性が最も尊ばれなければなりません。一方で、その成果が目に見える形で社会に還元されることが、とくに現在は強く求められていると言えます。競争の激しい、しかもテンポの早い研究の世界では、後追い的な研究から、独創性豊かな研究は決して生まれないといって良いと思います。むしろ視点を地域に根差した研究に置くことによって、未開拓でオリジナルな研究のシーズが生まれる可能性が高く、結果的に地域への貢献につながるものも多いのではないかと思います。発想の転換も時に必要であると考えます。

最後に申し上げたいことは、現在わが国は、国際化、情報化、少子高齢化、加えて未曾有の経済不況と、かつて経験したことがないほどに、様々な問題が同時に起こって来ており、第二の維新と

さえ言われております。人々はその対応に心のゆとりを失い、人心の荒廃は、モラルの低下と、殺伐とした人間関係を生み出しているように思えます。ある意味で、物質文明がもたらしたとも言える人間性の喪失を、こういう時代だからこそ、回復する必要があると思います。今世の中には職を失い、生活苦に喘ぐ人、孤独な高齢者、介護を必要とする人々など沢山存在しております。

このような人々に対する思いやりと、手を差し伸べる豊かな心を持っていただきたい。また人の好意に対し、感謝の気持ちを素直に表現できるようであって欲しい。これは決して難しいことではなく、本来人間に備わった感性であると信じております。些細なことのようですが、このような人々の気持ち一つ一つが、社会を明るくする基本であると思うからであります。人を裏切ること、貶めること、誹謗・中傷することなどは、人倫にもとる唾棄すべき行為であり、結局は人からも信頼されず、自身を惨めにするだけであります。またこのような風潮の中から、明るい人間社会は決して生まれないことも自明のことであります。

またこれからは国際化の時代であり、諸君には国際感覚を持った人間として、世界に雄飛して頂きたいと思います。国際人として備えるべき資質は、お互いが他国の文化に寛容であること、相手の意見に謙虚に、かつ柔軟に対応できること、国籍、思想、信条などを越えて、敬意と優しい配慮ができることが大切であります。言葉のハンデが有ったとしても、心が通い合うことで、殆どの問題は解消するはずであります。他国の人々と明るく、積極的に接することで、国際的友情を育くみ、国際貢献にも力を尽くして頂きたいと思います。一方で、日本のすぐれた伝統文化や、過去幾度となく困難を克服して来た、勤勉で克己心の強いわが国民性を思い起こし、自信と誇りを回復するとともに、世界に伝える努力もして欲しいと思います。

大学での教育、研究は、長い人生の中では、ほんのわずかな期間に過ぎません。諸君はこれから生涯をかけて実力を蓄え、人格を高めて行かなければなりません。気を引き締めて、研讃に励み、社会の付託に応えるべく、骨身を惜しまず努力されんことを心から念願する次第です。

卒業にあたり、新たな門出をお祝いするとともに、心構えのいくつかを申し上げて諸君へのはなむけの言葉といたします。

平成12年3月22日

静岡県立大学学長

廣 部 雅 昭

卒業生代表　答辞

春の訪れが日増しに感じられる本日、このように盛大な卒業式、ならびに学位記授与式を開催していただき、誠に有難うございます。学長先生をはじめ、諸先生方、ならびに御来賓の皆様方からのお祝いと激励のお言葉には、身の引き締まる思いです。また、只今は、在学生代表の方から、お心のこもった送辞をいただき、本当に有難うございました。卒業生を代表し厚く御礼申し上げます。

思い起こしますと、四年前、本学に入学を許可され、新しい環境に対する不安を抱きながら、このキャンパスの門をくぐったことが、まるで昨日のことのようによみがえってまいります。そうした不安も、諸先生方や職員の皆様の暖かいご配慮とご指導により、すぐに解消し、本日まで、実に楽しく、充実した日々を送ることが出来ました。そして、この四年間で大変多くのものを得ることができました。

私事（わたくしごと）になりますが、まず一年次は、経営や情報といった未知の学問分野と遭遇し、これらが社会と密接に結びついていることに、やりがいを感じたことを覚えています。そして、受験勉強の中には見出せなかった学問を追求する真のおもしろさを知り、無我夢中で勉学に励んだものです。

また、二年次、三年次と学年が上がるにつれ、県庁などの行政機関や企業との共同作業の場で、学問の成果を試す機会が増えてきました。このような機会に積極的に参加することで、確かな手応えを実感いたしました。さらに、公民館などの社会教育施設とのプロジェクトを通して、公立大学の学生として地域社会への貢献のあり方を、身をもって学びました。

就職活動と卒業研究に明け暮れた四年次。就職活動では、社会の厳しさに直面しましたが、自己を見つめ直し、自分の描く将来に向かって、自分の意思を最後まで貫き通すことが出来ました。

一方、学生生活の総仕上げである卒業研究では、連日連夜、コンピュータでプログラミングや画像データの処理と格闘しました。独自性に富んだ成果を求めて、自分と向き合い、着想・方法と表現を磨く作業に多くの時間を費やしたものです。このように、何事（なにごと）にも全力で打ち込むことが出来、今では達成感・満足感で一杯です。こうした思いは、私のみならず、卒業生の誰もが、それぞれの専門を通じて感じていることです。

入学以来、今日（こんにち）まで、ご指導くださいました諸先生方には、この場を借りて心から感謝申し上げます。

そして、在学中、共に苦労と喜びを分かち合い、共に励まし合った多くの仲間達、本当に有難う。大学生活を通じて、多くの友人を得たことは、何事にも代えがたい宝となりました。

本日、2000年という大きな節目の年に、私達はこの静岡県立大学を卒業いたします。これから新たな道に向かって出発しますが、社会が著しく変化している中で、その前途は、決して安易なものではないということも承知しております。今後、さまざまな試練に遭遇いたしましたときには、本学で培った、「チャレンジ精神」で立ち向かう覚悟でおります。

最後になりましたが、学長先生をはじめ、諸先生方、また本日御来席くださいました皆様方のご健康と、後輩の方々のご活躍をお祈り申し上げると共に、静岡県立大学の益々のご発展を心から念願いたしまして、答辞とさせていただきます。

平成12年３月22日

卒業生代表　経営情報学部経営情報学科

池ケ谷　安里

名誉教授の称号授与

5月26日開催の評議会で、青山英男前経営情報学部教授、原田昇前短期大学部教授、岩崎鐵志前短期大学部教授、佐々木崇暉前短期大学部教授に名誉教授の称号を授与することが承認された。

青山英男

前経営情報学部教授

青山前教授は、昭和62年4月に静岡県立大学の発足とともに、会計学、および財務管理論の両方が担当可能な類まれな教授として赴任を懇請され、平成12年3月まで経営情報学部において教鞭をとられた。

大学発足以来、長期にわたり本学評議員をつとめられ、経営情報学部念願の大学院創設のため、数年間にわたり大学院設立準備委員会委員長として多大の貢献をされた。平成10年4月、大学院発足と同時に研究科長に就任され、退職されるまでの間、大学院の整備・充実に力を注がれた。

研究面では、会計学および財務管理論の両方にまたがって活躍され、「株式会社財務会計の理論」「取引信用の管理」、「障害者雇用コスト論研究序説」など多数の著書により、学問の発展に努められ、障害者雇用コストの研究では、昭和62年、International Academy of Educationから、"Meritorious Achievement Award (International Affairs Leadership Parliament)" を受賞され、また、同年、Golden State University, Los Angeles にて経営学博士(Ph.D.)を授与された。

教育面では、実践的かつダイナミックな講義には定評があり、親しみやすくウィットに富んだ人柄によって多くの学生に慕われ、また、学部のよき文化の形成に大きな影響を与えられた。卒論指導や講義を通して、多くの職業会計人の育成にも力を注がれた。

一方、社会的活動としては、労働省専門委員として、モデル工場審査や障害者雇用に関する提言等をされ、その他、行政調査会教科書検定委員等を歴任され、また多くの講演、調査、執筆等において活躍された。

原田　昇

前短期大学部教授

原田前教授は、昭和63年10月に静岡県立大学短期大学部に着任以来、本学を退職された本年3月まで教授として11年6ヵ月にわたり学生の教育、ご自身の研究、大学の組織・制度改革、研究成果の市民への還元へと全力投球された。

原田氏の専門分野は内分泌・消化器外科の外科ですが、特に肝臓・胆嚢・膵臓の外科に関しては日本におけるこの領域の第一人者であり、治療法の改良や新しい術式の開発など、国内外において多くの業績をあげられた。また静岡県の特産品である緑茶の成分カテキンによる膵臓等の疾患予防や胃潰瘍の原因になる*H.pylori* 除菌の可能性の検討などの業績をあげられた。現在も、日本消化器外科学会評議員、日本臨床外科医学会評議員、日本消化器病学会評議員、東部肝臓学会評議員、東海外科学会評議員、日本胆膵生理研究会世話人などとして、活躍されている。

教育面では、難解な分野である解剖学や外科学を親しみやすくかつ興味を持続させて教えることに関してまさに達人で、学生に定評があった。

本学短期大学部在勤中は、短期大学部部長として平成3年から2期4年間、副部長として平成9年から1期1年間、平成3年から10年までの7年間は評議員の任にあたられた。

この時期は、短期大学部看護学科の静岡校への移設及び歯科衛生学科並びに社会福祉学科の新設という短期大学部静岡校創立の変革期であり、氏は山積する難問を粘り強く解決し、現在に至る基礎構築に中心的な役割を果たされた。

岩崎鐵志

前短期大学部教授

岩崎前教授は、昭和43年に静岡女子短期大学に着任され、爾来32年間研究と教育に従事された。その間、10年にわたり学生部長、図書館長、短期大学部長として、大学運営の重責を担ってこられた。

研究者として心血を注がれた主題は、洋学（蘭学）・国学の歴史的展開とその背景の研究であり、江戸後期から幕末にかけてそれらの新たな学問を、反骨の精神で担い、生きた文人の肖像を彫琢することである。氏の学風は歴史把握の理念形を用いて現実をつかみ上げるのではなく、ひたすら無数の古文書の語ることばに耳を澄ませ、そこからおのずと現れる現実を記述することにある。

氏の学風は、賀茂真淵、本居宣長に端を発する国学の学統に連なる人々の研究にも一貫して継続され、それらの人々を生み出した教育制度（寺小屋、藩校等）を記す文書、交遊録、往返の書状、日記等の膨大な古文書の博捜から、たとえば、賀茂真淵に国学研究を覚醒させた渡辺蒙庵の『蒙庵詩集』が掘りおこされ、国学史研究に眩しい光があてられたのである。なかんずく、真淵最晩年の弟子、内山真龍の研究は、氏の学風の充実した結晶と言える。

格物致知の学風は、教育においても一貫され、学生だけでなく市民講座、新聞・雑誌等への寄稿をとおして、人々に深く固い印象を残された。

氏が管理職として大学運営の重責を担われた10年間は、本学の解体と再生という、まさしく動揺と混乱の時期にあたっていたが、氏の歴史研究に培われた人心の機微の理解に支えられて、人の心はほぼ平らに推移した。

佐々木崇暉

前短期大学部教授

佐々木前教授は、平成２年４月に静岡県立大学短期大学部教授として赴任されて以来、平成１２年３月に退職されるまでの間、本学において教育と研究に尽力された。

氏の研究は、地域経済学の視点から詳細な分析、考察を加えた点に特徴づけられる。特に近年の研究では、平成不況以後のわが国経済のあり様を、大量生産・大量消費体制の行き詰まりと捉え、それを支えてきたルール、制度、慣行の限界性を理論的に解明されている。さらに地域に密着した研究としては、浜松地域の代表的産業である楽器産業に焦点を当て、その経営組織、生産組織、労使関係の特徴、行動戦略並びに企業内地域間分業の実態調査を踏まえ、それが地域の経済や産業にどのように構造化しているのか、どのように変容していったかを究明された。

教育面では経済学、現代社会と経済、食料経済などを講義し、学生教育に情熱を持って臨まれた。同氏の円満な人柄によって学生を魅了する講義を展開したことは夙に知られたところである。その一端は担当ゼミナールにおいて機関紙「モネタ」を発刊するなど学生の勉学の質的向上を図ると共に、その一連の作業を指導することを通して人格形成に資するものが大であった。

また氏は平成９年４月から平成11年３月まで学生部長として、さらに平成11年４月から平成12年３月まで短期大学部部長として、とくに本学の転換期における運営上の重責を果たされた。

薬学部の動き

薬学部長　　鈴木康夫

薬学部はこの4月、123名の新入生を迎えました。男子62名、女子61名の諸君は元気に大学生として活躍を初めております。今年の薬学部入学生の場合、偶然、男女の構成比がほぼ1：1であり、バランスの良い構成比となりました。中国からの留学生（男子、1人）も含まれており、様々な活動を通して県立大学を盛り上げていってほしいと思っています。

薬学を取り巻く教育の環境は、今、大きく変わろうとしています。平成4年に医療法の改正が行われ、薬剤師は法的に医師、歯科医師、看護婦とともに「医療の担い手」であることが明確に示されました。また、平成8年には薬剤師法の改正により「薬剤師は販売または授与の目的で調剤した時は、薬剤の適正な使用のために必要な情報を提供しなければならない」という条文が新たに付加されました。こうした背景から、「医療薬学」教育の充実が、各薬系大学で実行されて来ました。昨年5月には、厚生省、文部省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、国公立薬学部長（科長、学長）会議、日本私立薬科大学協会の6者が「薬剤師養成問題懇談会」（6者懇）を発足、1）薬学を履修する過程についての修業年限のあり方などの薬学教育充実方策、2）大学院修士課程の充実方策、修了者の医療現場でのニーズ拡大方策などにつき本格的な検討に入っております。現在、日本の薬剤師国家試験受験資格は、薬学部または薬科大学において4年間の薬学教育を受けた者にのみ与えられていますが、受験資格取得のための修業年限を6年間に延長しようとするものです。本学薬学部も、これにいち早く対応し、平成8年に医療薬学系2講座1研究室を新設、2週間の病院実習を開始しました。大学院も平成9年度から6ヵ月の病院研修を開始しています。さらに平成11年度（昨年度）の薬学部入学生から、新しい薬学教育に適応させた大幅なカリキュラムの改変を実行しました。この中には、現在よりも長い3週間の病院実習と1週間の調剤薬局実習（いずれも必修）の導入をはじめ、新しい医療系講義の導入などが盛り込まれました。また、平成11年7月には、本学の新大学院構想整備検討委員会に「医療薬学専攻」の設置（案）を提出し、実現に向けて努力しております。本学は、附属研修病院を持たないので、学部病院実習、大学院薬剤師実務研修（6ヵ月）の充実のために、県立病院（県立総合病院、将来的に県立こども病院、県立がんセンター）内に薬学教育機能を持つ組織作り、病院との間で臨床教授制度の導入などについて検討をはじめています。さらに薬学部の中に静岡県薬学教育協議会という組織を作りました。これは、日本および県薬剤師会、病院薬剤師会、薬学会、静岡県、製薬協会などとも連携して、本学の薬学・薬剤師教育の向上、情報交換、連帯感の育成などをめざすもので、今後の活躍が期待されます。

昨年度から、卒業時に、専門科目で最も成績の良かった薬学科、製薬学科の学生に、本薬学部の祖となる静岡女子薬学校（大正5年創設）設立者である岩崎照吉氏を記念して岩崎賞を創設し、授与しています。今年（平成12年3月22日）の卒業式では、薬学科から、加藤麻紀さんと隠岐知美さん、製薬学科から岩崎絵里さんに授与されました。受賞者は本学大学院へ進学しました。

昨年8月以降の薬学部におけるニュース的な事項を列記します。平成11年8月1日（月）－3日（水）：ふれあいサイエンスプログラムの実施；

静岡県内から43名、県外から2名、合計45名の高校生（1～3年生）を対象に「高校生のための最新薬学講座：新規な医薬品の開発をめざして」と題して体験入学を行いました（写真）。これは、文部省科学研究費補助金成果公開促進費の援助を受けました。数グループに分かれ、実際に薬学部棟で講義、実験・成果発表を行いました。大変好評で、受講者の内、4人（いずれも県内）が今年薬学部へ入学しました。今年度も予算は別枠ですが実行する予定です。

ふれあいサイエンスプログラムの参加者

平成11年9月25日（土）：第1回静岡「くすり」市民講演会の実施：日本薬学会および学長特別研究費の援助により、一般県民を対象に分かりやすいくすりの市民講演会（場所：グランシップ）を開催しました。「静岡くすり物語」、「日本生まれの大型新薬」、「海外旅行と健康・病気」、「静岡県立大学・薬学部のおいたち」などの講演とクスリについてのQ＆A（本学薬学部、県薬剤師会、県病院薬剤師会の専門家が解答）を行いました。

平成11年10月26日（火）、27日（水）：第4回日中健康科学シンポジウム開催（中国、杭州市）；本学と協定を結んでいる浙江省医学科学院との合同シンポジウムを行いました。本学からは、学長を初め、薬学部、食品栄養科学部、環境科学研究所から総勢13名が参加しました。活発な発表・討論、共同研究の推進、情報交換、交流などが行われました（写真）。

平成11年11月27日（土）：第8回薬学卒後教育講座の実施；薬学部および同窓会組織である静薬学友会が主催、日本薬剤師研修センターと共催、県薬剤師会、県病院薬剤師会が後援のかたちで行いました。廣部学長の特別講演「薬学教育・研究の将来」、および、「臨床治験制度の国際比較」、「臨床開発と薬剤師」というテーマで、それぞれ横濱重晴氏（山之内製薬（株）創剤研究所長）、安原眞人氏（東京医科歯科大学教授　薬剤部長）による講演を行ないました。

平成11年11月20日（土）、21日（日）：静岡県薬剤師指導者研修会への参加；薬学部3年生、小野陽介君、天野　賢君、濱地勇希君、神谷美緒君、寺田由香君、山田智香君および薬学部教員あわせて計16名がこれに参加し、薬局薬剤師研修教育に関する意見交換を行いました。このように教育を受ける学生の立場の意見も聞く研修会は有意義なものでした。

以上、薬学部では、様々な活動を通して教育・研究の推進、県民との連携をはかるよう努力しております。

第4回日中健康科学シンポジウム

平成12年度
科　学　研　究　費　内　定　状　況

■採択件数の推移

年度別	申請件数	採択件数	採択率
H 5	121	32	26.4%
H 6	108	32	29.6
H 7	113	42	37.2
H 8	137	53	38.7
H 9	168	45	26.8
H10	199	54	27.1
H11	176	63	35.8
H12	194	59	30.4

■部局別採択状況　平成12年度

部　局　別	申請件数	採択件数	採択率
薬　学　部	87	25	28.7%
食品栄養科学部	30	7	23.3
国際関係学部	18	10	55.6
経営情報学部	12	6	50.0
院生活健康科学研究科	30	7	23.3
看　護　学　部	17	4	23.5
合　　計	194	59	30.4

＊国際関係学研究科は国際関係学部に、環境科学研究所は生活健康科学研究科に併せ計上
＊申請件数、採択件数ともに継続課題を含む

平成12年度新規採択されたテーマ

■特定領域研究（A）（2）

・小林　裕和　　生活健康科学研究科助教授
葉緑体機能発現のシグマ因子を介する核支配調節機能

・今井　康之　　薬学部教授
細菌由来の糖鎖認識分子に対抗した宿主粘膜免疫系の応答に関する研究

・阿部　郁朗　　薬学部講師
コエステロール生合成の鍵酵素となるフラビン酸素添加酵素に関する生物有機化学的研究

■基盤研究（A）（1）

・小久保　康之　　国際関係学部助教授
コソヴォ紛争後の欧州国際政治の新潮流に関する研究

■基盤研究（B）（1）

・横越　英彦　　食品栄養科学部教授
食品成分と心のやすらぎ（情動）に関する研究

■基盤研究（B）（2）

・小林　裕和　　生活健康科学研究科助教授
高等植物における活性酸素解毒系誘導の環境ストレス応答機構

・鈴木　裕一　　食品栄養科学部教授
腸管におけるKイオンの吸収とその調節機序

・奥　直人　　薬学部教授
腫瘍新生血管標的化プローブによる血管新生抑制とがん治療

・中山　貢一　　薬学部教授
血行力学受容に伴う血管のチロシンリン酸化機構のリアルタイムイメージング解析

■基盤研究（C）（2）

・大平　純彦　　経営情報学助教授
協力ゲームの理論による自治体の地域連携事業の費用分担に関する研究

・伊勢村　護　　食品栄養科学部教授
緑茶カテキン類および茶高分子成分の癌細胞アポトーシス誘導メカニズム

・合田　敏尚　　食品栄養科学部助教授
糖質消化吸収関連遺伝子の転写調節の分子機構

・竹元　万寿美　　薬学部助手
酸素法によるアトロプ選択的ビアリールカップリング反応の開発

・加藤　善久　　薬学部講師
PCB及びPBrBのメチルスルホン代謝物による内分泌攪乱作用の発現とその作用機序

・阿部　郁朗　　薬学部講師
ステロイド系抗生物質の成合成に関わる新規オキシドスクアレン閉環酵素の構造機能解析

■萌芽的研究（2）

・三輪　匡男　　薬学部教授
病原性大腸菌毒素Stxによる腎水チャンネル（アクアポリン）障害検査法の開発

■奨励研究Ａ　（２）

・湖中　真哉　　国際関係学部助手
ケニアの牧畜社会における自然・家畜・人間認識の統合的研究

・森　勇治　　経営情報学部助手
管理会計論における認知科学アプローチ研究

・丹羽　康夫　生活健康科学研究科助手
葉緑体機能発現に異常をきたした変異体の単離と解析

・古旗　賢二　　食品栄養科学部助手
カプシノイドのアドレナリン分泌活性による体熱産生効果の評価と、酵素的合成法の確立

・五十里　彰　　薬学部助手
マグネシウム輸送体の調節機構と高血圧発症に対する影響

・志賀　由美　　看護学部助手
米国への出稼ぎ看護労働者が自国の看護政策・教育改革に及ぼした影響に関する研究
－フィリピン、韓国、日本での国際比較－

研究助成の採択

平成11年度　財団法人　薬学研究奨励財団研究助成　平成11年3月28日決定
阿部　郁朗　静岡県立大学薬学部生薬教室　講師
「オキシドスクアレン閉環酵素に関する生物有機化学的研究」

平成12年度　財団法人　三栄源食品化学研究振興財団研究助成　平成12年3月8日決定
阿部　郁朗　静岡県立大学薬学部生薬教室　講師
「ムラサキイモ色素生産に関わる酵素遺伝子の精密機能解析」

平成12年度　財団法人　武田科学振興財団研究助成　平成12年3月21日決定
阿部　郁朗　静岡県立大学薬学部生薬教室　講師
「プロトステロール合成酵素活性中心構造の解明」

財団法人ライフサイエンス振興財団　国際交流援助
「第7回中国-日本国際微生物学会議」への出席援助金
薬学部　微生物学教室　助教授　増澤俊幸

平成12年度　厚生科学研究費補助金　(新興・再興感染症研究事業)
研究題目　げっ歯類を保有体とする希少輸入感染症（回帰熱、レプトスピラ、ペスト）の疫学的調査、及び迅速診断法と防疫対策の確立
主任研究者　増澤俊幸　薬学部　助教授

人事

採　用

４月１日付け

寺尾　康
国際関係学部国際言語文化学科助教授

黄倉　崇
薬学部薬学科助手（薬剤学教室）

渡邉　貴之
経営情報学部助手

６月1日付け

仁科　　明
国際関係学部国際言語文化学科講師

受 賞

第１４回（平成１１年度）望月喜多司記念研究奨励賞受賞

受賞研究題目Polychlorinated biphenylの薬物代謝酵素誘導効果発現における3-メチルスルホン代謝物の役割とその内分泌攪乱作用に関する研究

薬学部薬剤学教室　講師　加藤　善久

平成12年3月15日、東京都千代田区霞ヶ関の法曹会館で（財）食品農医薬品安全性評価センター理事長（望月信彦氏）より望月喜多司記念賞の贈呈が行われた。

望月喜多司記念研究奨励賞は、わが国の食品、農薬、医薬品等の安全性あるいは毒科学の分野で、最近において科学・技術の面で優れた研究を行い、さらに将来の発展を期待しうる者に授与される賞である。

第７回国際リポソーム会議でポスター優秀賞受賞

去る4月12日から15日までカリフォルニア州ナパで第7回国際リポソーム会議（Liposome Research Days Conference）が開催され、当大学からは2教室6演題の発表がなされた。本学薬学部博士課程2年(放射薬品学・奥教授研究室）の浅井知浩君は「腫瘍新生血管を標的としたリポソーム」という演題で発表した。がんの増殖には、がん細胞に栄養や酸素を補給する血管新生が必要である。浅井君はこのがんに新たに出来る血管を標的とした薬物送達を目的として新生血管に特異的に結合するペプチドを見出し、このペプチドで修飾したリポソームに制がん剤を封入すると、がんの増殖が抑えられることを示した。がんの新生血管はがんの種類によらないため、浅井君の研究成果は種々のがんに有効な治療法の開発に結びつくものと高く評価され、大学院生および博士研究員の優秀な発表に対して贈られるポスター優秀賞（約100演題中第2位）を受賞した。なお最優秀賞にはカナダラバール大学のMr. Gagneが選ばれた。浅井君には2002年にベルリンで開かれる第8回国際リポソーム会議の宿泊参加費免除の特典が与えられる。

学術集会の開催

第１５回インフルエンザ研究者交流の会・シンポジウムの開催

日時：平成１２年3月３日２０００年4月２２日（土）～２４日（月）

場所：東レ総合研修センター（三島市）

オーガナイザー：インフルエンザ研究者交流の会会長　本学薬学部長　鈴木康夫

インフルエンザウイルス研究者が一堂に会して泊まりがけで研究成果の発表・討論を行いました。分子生物学的基礎研究のみならず、ウイルスの流行予測、疫学調査、ワクチンや抗インフルエンザ薬の開発、臨床診断・解析などグローバルな視点からインフルエンザおよびその原因ウイルスのすべてについて討議されました。口頭発表演題51，招待講演2，パネルディスカッションを実施。参加者は、大学、国公立研究所、病院、企業などから約130名で過去最大の会となりました。

第６４回日本生化学会中部支部例会の開催

日時：平成１２年5月１３日（土）

場所：静岡県立大学

オーガナイザー：日本生化学会中部支部会長　本学薬学部長　鈴木康夫

我が国中部地域（愛知、岐阜、長野、三重、静岡）の生化学、関連領域の研究者の交流の場として開催。今回、2つのシンポジウム（ＤＮＡの複製と修復の機能不全とその病態から4題、糖鎖と病態ーその分子基盤ーから5題）およびポスター発表（40演題）を実施、今年度の奨励賞（別掲載）を決定しました。120名を越す参加者がありました。

学生用推薦図書の購入

学長特別研究費による調査研究の一環により、学生の教育環境、生活環境の改善と充実のために、学生推薦図書調査と購入が行われた。

推薦図書は付属図書館２階の特別閲覧室に推薦図書コーナーとして配架されている。

書籍リスト

著　者	著　　書	出版年	出 版 社 名
天野　郁夫	大学―挑戦の時代	1999年	東京大学出版会
島野　清志	危ない大学・消える大学2000年	1999年	エール出版社
S.G. クランツ （蓮井　敏訳）	大学授業の心得	1998年	玉川大学出版部
喜多村和之	現代の大学・高等教育	1999年	玉川大学出版部
松田良一、正木晴彦 （高等教育フォーラム監修）	日本の理科教育があぶない	1998年	学会センター関西
朝日新聞社会部	学級崩壊	1999年	朝日新聞社
デイビット・ロバートソン （竹澤千恵子監訳）	人権事典	1999年	明石書店
ジョージ・J・アンドレオ・ポーロス リチャード・ピエール・クロード （黒沢惟昭監訳）	世界の人権教育―理論と実践	1999年	明石書店
大原健士郎	やる気のでる人、出ない人	1999年	法研
永守　重信	「人を動かす人」になれ！	1998年	三笠書房
渡部　昇一	新・知的生活の方法 ものを考える人考えない人	1999年	三笠書房
堀　紘一	人と違うことをやれ！	1999年	三笠書房
リチャード・カールソン ジョセフ・ベイリー （大沢章子訳）	あくせくするな、ゆっくり 生きよう！	1998年	主婦の友社
デイヴィット・クンツ （畔上　司訳）	急がない！ひとりの時間を 持ちなさい	1999年	主婦の友社
鈴木由美子	自立する力を育てる教育	1999年	玉川大学出版部
山本　毅雄	21世紀の本の読み方	1999年	岩波書店
木野　親之	松下幸之助　叱られ問題	1999年	致知出版社
中山　庸子	朝一番、やる気がふくらむ言葉	1999年	三笠書房
佐藤　綾子	1分間で自分を変える	1999年	三笠書房
ポール・D・ティーガー バーバラ・バロン＝ティーガー （栗木さつき訳）	16の性格	1999年	主婦の友社
堺屋　太一	明日を診る	1999年	朝日新聞社
堺屋　太一	明日を読む	1998年	朝日新聞社
赤瀬川源平	老人力	1998年	筑摩書房

著　者	著　　書	出版年	出 版 社 名
光田　明正	「国際化」とは何か	1999年	玉川大学出版部
小林　達雄	縄文学の世界	1999年	朝日新聞社
橋口　尚武（代表）	海を渡った縄文人 縄文時代の交流と交易	1999年	小学館
泉　拓良・西田　泰民	縄文世界の一万年	1999年	集英社
環境教育事典編集委員会編	新版環境教育事典	1999年	旬報社
瀬名　秀明	小説と科学	1999年	岩波書店
ジェームス・トレフィル （美宅成樹訳）	科学１０１の未解決問題	1999年	講談社
古川　俊之 （東洋紡百周年記念バイオテクノロジー研究財団）	科学研究の大航海時代	1997年	学会センター関西 （学会出版センター）
永山　久夫	歴史は「食」で作られる	1999年	祥伝社
鶴見　隆史	新・食物養生法	1999年	第三書館
（社）日本化学会	ダイオキシンと環境ホルモン	1998年	東京化学同人
天笠　啓祐	環境ホルモンの避け方	1999年	コモンズ
環境総合研究所	もっと知りたい　環境ホルモンとダイオキシン －問題解決へのシステムづくり－	1999年	ぎょうせい
渡辺　雄二	遺伝子組み替え食品最前線	1998年	家の光協会
寛仁　親王	癌を語る	1999年	角川書店
人権文化を育てる会（編）	わたしと人権	1998年	ぎょうせい

新刊案内

●本学関係者著書紹介

納家政嗣・梅本哲也編　（国際関係学部　教授）

「大量破壊兵器不拡散の国際政治学」　　有信堂高文社　2000年４月発刊

目次

第Ⅰ部　総　説

第１章　大量破壊兵器不拡散の思想と展開（納家政嗣）

第２章　国際レジームとしての核不拡散体制－「不平等性」の存在根拠（梅本哲也）

第３章　非国家主体への拡散の可能性（加藤朗）

第Ⅱ部　冷戦後の不拡散体制

第４章　ポスト冷戦期の核不拡散体制（浅田正彦）

第５章　化学兵器の拡散と拡散防止（浅田正彦・杉島正秋）

第６章　生物・毒素兵器拡散問題（杉島正秋）

第７章　弾道ミサイルの拡散と規制（岩田修一郎）

第Ⅲ部　地域的な不拡散問題

第８章　朝鮮半島における大量破壊兵器問題（道下徳成）

第９章　南アジア（西脇文昭）

第10章　中東における大量破壊兵器の拡散状況と不拡散努力（池田明史）

第11章　非核兵器地帯と核不拡散（戸崎洋史）

第Ⅳ部　総　括

第12章　大量破壊兵器の不拡散－議論のまとめ（梅本哲也・納家政嗣）

Books information

平成12年度　漢方の学習と薬草園見学の会

県立大学薬学部では、標記の会を企画しました。この機会に、漢方の基本を知り、薬草と親しむことにより、自分の健康を保ちまた家族の健康を見つめなおしてはいかがでしょうか。多数のご参加をお待ちしています。

【日時と内容】

★第１回★　平成12年６月４日（日）（開催済み）

■漢方の学習

『アトピー性皮膚炎、薬草の栽培ほか』(9：30−12：00)

■薬草園見学(13：00−)

★第２回★　平成12年８月６日（日）

■漢方の学習

『アトピー性皮膚炎、静岡県の薬草ほか』(9：30−12：00)

■薬草園見学(13：00−)

★第３回★　平成12年10月１日（日）

■漢方の学習

『アトピー性皮膚炎、薬草よもやま話ほか』(9:30−12:00)

■薬草園見学(13：00−)

【場　　所】 静岡県立大学一般教育棟１階2103教室
静岡県立大学薬草園

【講　　師】

あらなみクリニック（島田市）	院　長	荒波　暁彦
中国・浙江省中医大学	助教授	余　勤
静岡県立大学	名誉教授	上野　明
神戸学院大学薬学部	名誉教授	斉木　保久
静岡県立大学薬学部付属薬草園園長	教　授	野口　博司
静岡県立大学薬学部漢方薬研究施設	教　授	横田　正實
静岡県立大学薬学部付属薬草園主任	助教授	宮原　武恒
静岡県立大学薬学部客員共同研究員		宮本　秀人
静岡県立大学薬学部病院・社会薬学	助　手	谷澤　康玄

【協　　力】 静岡県立大学植物研究部

【参加費用】 無料

【参加方法】 開催当日、9：30までに直接会場にお越し下さい。

【問い合わせ先】 電話(054)−264−5761または、(054)−264−5762
静岡県立大学薬学部漢方薬研究施設

はばたき寄金からのお知らせ

Ⅰ　平成１１年度はばたき寄金事業・収支結果報告

１　事業結果

（１）事業助成　　第4回日中健康科学シンポジウム訪中団に金16万円を助成した。

（２）奨学支援　　モスクワ国立国際関係大学へ派遣した短期交換留学生に金5万円を授与した。

（３）成績優秀者表彰　優秀な成績をおさめた学部卒業生7人に対しそれぞれ賞状と図書券２万円を授与した。

２　収支結果

○収入		４，４０９，９５９円	
内訳	前年度繰越金	３，６３０，０６２円	
	寄付金	７７８，０００円	（学内27件　学外7件）
	雑収入	１，８９７円	
○支出		３７４，６８９円	
内訳	事業助成等	３５０，０００円	
	雑費（賞状筆耕代等）	２４，６８９円	
○差引残高		４，０３５，２７０円	(平成12年度へ繰り越し)

Ⅱ　平成１２年度事業

短期交換留学生に対する奨学支援金の授与

平成11年度下期にフィリピン大学に短期交換留学生として派遣した、国際関係学部４年生近藤唯君に対し、4月27日、廣部学長から奨学支援金５万円を授与しました。

５月末寄金残額　　４，１２５，３２０円

［４月以降の寄金者（教職員敬称略）］　寄付金総額　9万円

○学内　　木苗直秀（食品栄養科学部）　木村良平（薬学部）　匿名希望者（1名）

○学外　　大石紀子様（清水市）

（担当　事務局企画スタッフ　TEL５１０３）

近藤さんへの奨学支援金授与

故石坂　均静岡薬科大学名誉教授に叙位の伝達

平成12年３月10日に御逝去された故石坂名誉教授が正四位に叙位され、叙位伝達式が４月19日に学長室にて行われた。

伝達式は、廣部学長、石田局長、薬学部大石助教授に立会いのもと行われ、夫人に学長から位記が手渡された。

石坂名誉教授は、昭和44年に静岡薬科大学教授。昭和59年に静岡薬科大学名誉教授。研究面では体育史、中でも古代ギリシャ史を専門とし、民族の成立、特性を整理し、風土性との関連を考慮しつつ、その発展を追及した。これらの研究を静岡県体育協会史の編纂に生かし、風土性に恵まれた本県の体育事情の解明を試みたことは大いに注目を集め、体育関係者の高い評価を得ている。

また前県ラグビーフットボール協会理事長、全国ラジオ体操連盟副理事長を務められた。

昭和60年に郵政大臣よりラジオ体操普及組織功労賞を贈与され、昭和63年に、静岡県体育協会60周年記念式典において、特別功労賞を受賞。その功績に対し平成４年に勲三等旭日中綬章が授与されている。

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表イトウ秀雄氏）は５月18日、本学へ今年入学した留学生11名（薬学部１名、国際関係学部８名、経営情報学部２名）に入学祝金を贈呈した。

日本平留学生基金は、県内に留学する主として東南アジアの大学生に金銭的援助を行うことを目的として、平成８年１月、イトウ秀雄氏により設立された基金で、今年で５年目を迎える。イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は400を超える個人・団体にのぼる。入学祝金は、学部に今春入学した留学生全員に一時金として一万円が支給される。

贈呈式でイトウ代表は異国の地での勉学は大変だろうが、地元の人々の思いが込められているこの入学祝金のことを忘れないでほしいと挨拶し、祝金と盲目の写真家伊志井桃雲氏の写真集を留学

生一人一人に手渡した。

留学生を代表して、国際関係学部の安　石泉さんが留学により新しい土地での生活を始めたが不安も多い。この基金により地域の皆さんが暖かい目で支援して頂いていることを知り感謝している。皆さんにお礼するためにも学業に励み、地域の皆さんとの日常の交流を大切にしていきたいと感謝の言葉を述べた。

静岡トヨタ自動車奨学生授与式

静岡トヨタ自動車奨学生授与式が４月18日に本学応接式で行われた。

本奨学金は、本学に現在17ある本学学生のみを対象とした奨学金の中で最も早く創設されたものであり、今年度で９回目を迎える。月額３万円が１年間支給される。

奨学金の募集は「私の研究と生活」をテーマにした小論文で行われ、13名の応募があり、審査の結果、大学院生活健康科学研究科　修士２年　矢澤　彩香さん　国際関係学部　３年　方　珠淨さんの２名が奨学生と認定された。

授与式では、静岡トヨタ自動車株式会社田中伸次取締役社長が、本学で最初に創設した奨学金が、皆さんの勉学の励みになってほしいと挨拶した。

奨学金を授与された矢澤さんは、本奨学金を頂いて今後も勉強に励みたい。方さんは台湾の日本企業で働いた経験があり、日本に留学することを希望した。奨学金を国際交流に役立てたいとお礼の言葉を述べた。

株式会社静岡新聞社・静岡放送株式会社奨学金授与式

静岡新聞社・静岡放送奨学金授与式が4月28日に本学学長室で行われた。

本奨学金は、本学に視覚障害学生として初めて入学した国際関係学部1年生、大胡田　裕さんに対して授与されたもの。

奨学金は視覚障害学生を対象としたもので月額３万円が、４年間支給される。

授与式では、株式会社静岡新聞社・静岡放送株式会社大石滋専務取締役から、視覚障害を持ちながら勉学に励む学生を支援したいと授与の挨拶があった。

奨学金を授与された大胡田さんは、この奨学金を図書や資料の点字訳の費用などに有効に利用して、勉学に励みたいとお礼の言葉を述べた。

谷田風土記 64

『谷田の茶もみ唄』

丘陵地帯にお茶畑の広がる、この谷田の地は、美味しいお茶の産地のひとつとして有名である。品種改良に熱心だった杉山彦三郎がいたこと、県立茶業試験場があったことがまわりの意識を高めたためだろう。

その谷田でいまも歌われている『茶もみ唄』がある。茶もみ唄は、茶つみのそれとは、少し異なる。茶師と呼ばれる茶もみ専門の職人が、『ホイロ』という、紙を張り、下に炭火を置いた装置の上で、いわゆる『でんぐりもみ』をするときの唄である。

信州の馬子唄に似る

手もみ茶で、静岡は、日本一だが、この手もみ唄には、遠州節と、駿河節の二つがある。

歌詞は共通したものが多いが、旋律に多少の違いがある。駿河のそれは、信州の馬子唄に似た、追分風なものを感じさせるが、遠州のそれは、雲助唄、長持ち唄のような素朴さがある。

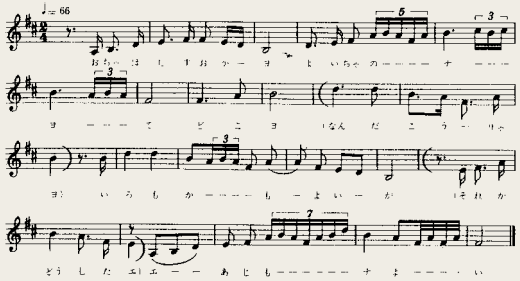
谷田・茶もみ唄の歌詞には、静岡の茶町に集められたお茶が全国へ送られていく風景が歌い込まれている。

静鉄電車は、その静岡の茶町から、清水港へお茶を運ぶ軽便鉄道が発展したものなのである。

なお、この『茶もみ唄』をテープに収録しているので、希望者には、テープをさし上げます。

（国際関係学部教授・高木　桂蔵）

谷田の茶もみ唄



こんな事があったら要注意

「怪しい勧誘」に気づく手がかり

（看護学部　西田公昭講師　提供）

▽販売や入会という目的を棚上げにして、とりあえず特定の場所に誘う。
▽お世辞や賛美によって気分を高めたり、自尊心をくすぐったりする。
▽恐怖心、不安感、はく奪感などの弱点をついてくる。
▽親切そうな勧誘を受けたその場で、判断や決定を迫ってくる。
▽やたらに肩書きや有名人、権威者の名前を使って信頼を得ようとする。
▽該当する会や商品について第三者の評価を得るチャンスをそれとなく与えないようにしている。
▽正式の団体名や代表者の名前を名乗らず勧誘者個人の名前を使ったり、ダミーの名称を使ったりする。
▽悩み事や心配事に対する簡単な解決は、勧誘を承諾して実践するだけだと主張してくる。

こうした問題に困ったり、不安を感じている方は、学生部に相談（メール可）して下さい。
また、あなたの身近に困っている方がいたら、相談するよう勧めてください。　　学生部長　木村良平

学内ニュース「はばたき」への掲載について

教員の新刊案内、受賞、研究助成への採択、学会開催などの教職員関係のニュースや投稿を歓迎します。
掲載希望がありましたら、事務局企画・情報スタッフ（管理棟２階）あてに原稿をお寄せください。

企画・編集　静岡県立大学広報誌編集会議　TEL 054－264－5103　E-mail：kijo4@gm.u-shizuoka-ken. ac. jp